

口-99

四国地区における肺癌登録症例の検討
-昭和55,56,57年度の成績-

四国肺癌研究会

○露口 勝、安藤 博、影山 浩、森岡茂治、
町田健一、上田暢男、中野 正、粟津良祐、
陳 鋼民、矢毛石陽三、螺良英郎、井上権治

四国地区において肺癌の診療に携わっている医師が中心になつて四国肺癌研究会が発足してから既に7年になる。この研究会では、昭和55年度より参加施設の肺癌患者の登録事業をはじめている。昭和57年末でこの登録事業も3年になつたので、これまでに各施設から登録された肺癌患者について臨床的検討を加え報告する。

肺癌患者の登録事業に参加された施設は、四国四県にまたがる11施設である。登録に際しての調査用紙は、葉書き1枚に書ける程度の簡単なものとし、忙しい日常診療の負担にならないよう配慮して作成した。すなわち、患者の姓、年令、初診年月日、肺癌の病期、組織型、治療法、予後など大まかな臨床事項を調査するに止めた。

成績：昭和55,56,57年度の3年間の肺癌登録患者の総数は803例である。性別は男性612例、女性189例で、男女比は3.2対1である。年令分布は、29才以下6例(0.7%)、30~39才7例(0.9%)、40~49才33例(4.1%)、50~59才174例(21.7%)、60~69才266例(33.1%)、70~79才279例(34.7%)、80才以上30例(3.7%)で、70才代に患者のピークがあり、60才代を含めると全体の67.7%を占めている。組織型は、腺癌306例(38.1%)、扁平上皮癌265例(33.0%)、小細胞癌114例(14.2%)、大細胞癌38例(4.7%)、その他の癌21例(2.6%)、組織型不明38例(4.7%)である。組織型で性差が著しいのは扁平上皮癌(男女比7.5対1)、小細胞癌(同5対1)、大細胞癌(同5.3対1)であつた。腺癌は、306例中女性179例、男性127例と女性が男性より多く、また女性肺癌全体の70%(179/256)は腺癌であつた。

TNM分類(JJC, 1978年)では潜伏癌(T_xN₀M₀)3例(0.4%)、I期175例(21.8%)、II期124例(15.4%)、III期192例(23.9%)、IV期253例(31.5%)、不明56(7.0%)であり、III, IV期の進行癌が過半数を占めている。また主たる治療法をみると、手術治療233例(29.0%)、放射線治療279例(36.9%)、化学療法212例(26.4%)、免疫療法その他61例(7.5%)であり、放射線治療が行われたものが多い。予後については最近の症例であり、まだ評価できないので今回の検討から省いた。

今回の報告は四国という限られた地域の極めて短期間の成績であるが、かなり多数の症例が集積され、地方における肺癌の実態という点で極めて意義深いものと考えている。

口-100

日本病理剖検輯報よりみた日本の肺癌とその推移(1958-80年)

浜松医科大学第一病理 〇森田豊彦
癌研究所病理部 菅野晴夫

目的：日本病理剖検輯報に登録の始まった1958年度からの東大医学部病理学教室の肺癌剖検例について第16回の本学会より種々の角度より検討し報告してきたが、日本の他施設の肺癌剖検例と比較し現況を理解するため以下の検討を行ったので、その結果を報告する。

方法：日本病理剖検輯報第1-23輯(1958-80年度)に記載された性別の明らかな肺癌剖検例につき、男女別に年令と組織型を調べた。重複癌のうち全身に影響の少ない肺癌、潜在肺癌例は除いた。未分化癌の実体はつかみにくいがやむを得ずそのまま用いた。結果を各年毎及び5年区分(第1-5期)して推移をみた。

結果：1. 全体の傾向 1958年男313、女92例、70年男1029、女368例、80年男2238、女750例と次第に症例が増え、この間に男7倍、女8倍となった。全剖検例中の肺癌は男性5%から10%に、女性3%から5%へ、全悪性腫瘍症例中の割合は男性1.4%から1.7%へ、女性7%から10%へと何れも漸増が認められた。

2. 男女比 5年区分した肺癌症例の男女比は、2.8-3.0の間でありほぼ一定しており、同期間の東大剖検例の2.9とほぼ等しく、瀨木の資料1966-67年による青木の計算の2.5よりやや高かった。

3. 組織型の割合 5年区分の男性では、腺癌は1-2期37-8%、他期33-4%、扁平上皮癌は1期30%、他期32-4%、小細胞癌は1-3期7-8%、4期は10%を越え5期は20%に近い。大細胞癌は1期のみ11%、以後6-8%。女性では各期とも腺癌が過半を占め52-58%の間、扁平上皮癌は18-20%の間にあった。小細胞癌は1-3期6-7%、4-5期9-10%とやや増加、大細胞癌は1期10%、以後7-3%へと減少した。組織型不明は組織型割合より除いたが、1期は全体の男17、女18%を占め、80年では男女とも1%未満と漸減が明瞭だった。

4. 組織型別年令分布 男性では第1期の腺癌と小細胞癌が50代ピーク、他は60代、2-4期は各組織型とも60代ピーク、5期は僅かながら何れも70代ピークとなっている。60-70才代より扁平上皮癌が腺癌に代わり最多となる。女性では各年代とも腺癌が最多だが、腺癌は1期が50代、大細胞癌は1-2期50代ピークその他、各組織型とも60代がピークで、5期は腺癌の60代を除き70代がピークで肺癌剖検症例の高令化が認められた。

5. 他腫瘍との関係 男性では各年を通じ胃癌に次ぎ2位を占め、初期は胃癌は肺癌の1.8倍、80年ではほぼ同数に接近した。女性では前半は胃癌、子宮癌、白血病に次ぎ4位で、後半に2位となり、初期は胃癌は肺癌の3.0倍、1980年では1.6倍と差が縮まってきた。